
グッバイ、ネバーランド

蒼山れい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グッバイ、ネバーランド

【Nコード】

N3874I

【作者名】

蒼山れい

【あらすじ】

「ずっと僕のそばにいて」二年ぶりに再会した美しい従弟・白羽は、そう言っただけで霧を監禁した。天使のような微笑みの下に、暗く歪んだ狂気を孕みながら……。永遠の子ども時代を夢見た少年と少女の、ひと夏の破綻と再生の物語。

三年前、春の雨（前書き）

本作には、特定の登場人物に対して精神的な苦痛を強いる描写が
ございます。苦手な方はご注意ください。また、この物語はフィク
ションであり、実在の人物・実際の事件等とは一切関係ありません。

三年前、春の雨

まだ深まりきらぬ春の雨は冷たかった。

白く濁った吐息に、^{みお} 澪は首を竦めた。顎のあたりで切り揃えたばかりの短い髪が剥き出しの項を撫でる。^{うなじ} 濃紺のセーラー服は、今の季節にマフラーも巻かず外にいるには向かなかった。

「まったく、いやな雨ねえ」

隣に並んだ遠縁のおばが、傘の内側から曇天を見上げて呟く。近くにはいた年嵩のおばが「本当にねえ」と頷いた。

「寒いつたらありやしない。余計湿っぽいお葬式になっちゃうわよ」

「紗夜ちゃん、まだ若かったのにねえ。事故だったんですって？」

「居眠り運転のトラックに突っこまれたらしいわよ。即死だったって」

「血まみれで頭が潰れてたっていうじゃない。あんなにきれいな子だったのに」

「息子さん、小学校を卒業したばかりなんですよ？ 白羽くんだったかしら」

「まだまだこれから大きくなるのを見たかったでしょうに。かわいそうにねえ……」

その言葉に、どれだけ真実悲しむ心がこもっているだろうか。雀のおしゃべりのような会話に、澪は顔をしかめた。

「あら、あの子……」

年若いほうのおばが驚いたように声をひそめる。追いかけた視線の先には、黒い学生服姿の少年が傘も差さずに佇んでいた。

色素の薄い髪は水を吸って額に張りつき、真新しい学生服もすっかり濡れそぼっている。俯いた顎の先から雫が滴るのかもかわず、少年はぼんやりと虚ろなまなざしを足元にさまよわせていた。

灰色に煙る薄闇に浮かび上がる白い顔は、もとの端整さも相まってぞっとするほど美しかった。中性的な幼さと人形めいた無表

情が、余計に彼を人ではないもののように見せている。

「まあ……」

年嵩のおばが咎めるような声を洩らす。少年へ向けられた目に決して思わしくない色が浮かんでいるのを認め、澪はためらうことなく歩き出した。

ぱしやりとローファーで水たまりを蹴れば、おばたちがハツとしてこちらを見る。澪は冷めた一瞥を返し、立ち尽くす少年に近づいた。

「白羽」

名前を呼ばれた従弟は、のろのろと顔を上げた。ずぶ濡れの彼に傘を分けてやりながら、澪は白羽を睨めつけた。

「あんた、何やってんの？」

「……澪ちゃん」

白羽は呆けたように目を瞬かせ、それから力のない笑みを浮かべた。どれだけ雨に打たれていたのか、頬からは血の気が失せ、唇は紫に変色しかけていた。

澪はスカートのポケットからハンカチを取り出すと、濡れた従弟の頬を拭いはじめた。白羽が困ったように「澪ちゃん」とくり返す。「ハンカチ、濡れちゃうよ」

「あんたに風邪引かれるほうがよっぽど大変よ。叔父さんも、みんな忙しいんだから」

「……ごめん」

わかつてるならするんじゃないわよ、という文句は口から出る前に消えた。澪は唇を引き結ぶと、ほぼ同じ高さにある白羽の顔を覗きこんだ。

「すっかりしろなんて言わないわ。あんた、まだ子どもだもん」

「うん……」

「叔父さんも、父さんも母さんも、順兄もいるわ。難しいことは全部、それがわかる大人に任せておけばいいのよ」

「うん」

「あたしもまだ子どもだけど、あんたよりふたつもお姉さんだわ」
「うん」

「だから、みんなが戻ってくるまで——あんたのそばにいるわ」
どこか遠かった白羽の瞳が、ようやく澪を映す。澪は白羽の頭を肩に引き寄せた。

「あたしがそばにいるから……無理なんてするんじゃないわよ」
抱きしめた少年の体は、ひどく冷えきっていた。

白羽はしばらく肩を強張らせていたが、おそろおそろ従姉の背に腕を回し、拒まれないと知った途端に全身の力を抜いた。

預けられた重みに思わずよろめく。その拍子に傘を落としてしまったが、澪は動けなかった。

引き絞るような悲しい嗚咽が聞こえてしまったから。

霧雨が冷気を伴ってセーラー服に染みこんでくる。思わず背筋が震えたが、それ以上に肩を濡らす涙が冷たかった。

こみ上げてくる切なさに、澪はそつと目を伏せた。
中学校卒業とともに白羽と別れる、ちょうど一年前のことだった。

七日目、ふたりの夏休み

最近の漑の一日は「おはよう」とはまったく別の言葉からはじまる。

顔を洗ってダイニングに向かうと、炊き上がったばかりのご飯の香りが部屋中を満たしている。この家の家事を取りしきる人物は、断固として朝はご飯派らしい。トースト一枚でかまわない漑には理解しがたいこだわりだ。

ご飯の香りに混じる味噌や醤油のにおい。出されるおかずのほとんどは、昔から日本の食卓を彩ってきた和食ばかりである。たまにはスクランブルエッグやベーコンが食べたいという漑の主張は、あえなく却下され続けている。

漑はすっかり指定席となった窓側の椅子を引き、腰を下ろした。テレビを点けて適当にチャンネルを回す。ニュースキャスターが朝一番の速報を読み上げているのを眺めていると、キッチンからひよっこりと顔が覗いた。

「おはよう、漑。もうすぐご飯できるから、先に着替えてきて」とろけるような笑顔を見せたのは、触れがたいほどの美貌を持った少年だった。長い睫毛が頬に落とす影さえ優美に映る、完璧な造作。だが見る者の胸に残るのは、神々しさよりもガラス細工のような儚さだった。

しかし、見慣れた顔に今更なんの感動も浮かばず、漑はいつものように淡白な声音で言った。

「あたしをここから出して」

少年はぱちりとひとつ瞬いた。

「どうして？」

「帰りたいからに決まってるでしょ」

「家にだれもいないからここにいるんじゃない」

「……一週間」

ん？ と小首を傾げる少年に、漑は冷たく目を細めた。

「ここに来てから一週間、一度も外に出てないんだけど」

「出る必要なんてないよ」

キッチンから少年が出てくる。Vネックのシャツにジーンズ、その上からエプロンをつけた彼は、顔に似合わず男らしい体つきをしていた。痩せているが、それは無駄のない細さだ。半袖から伸びる引き締まった腕、そこから続く指の長い筋張った手は女性にはありえぬもので、漑は逃げるように目を逸らした。

顔立ちと体格のアンバランスが、曖昧だからこそ危うい美しさを少年に与えていた。

少年は漑の隣の席に座ると、テーブルに置かれた彼女の片手を取った。絡みついてくる指に、漑は微かに眉をひそめる。

「……白羽」

「なあに？」

「監禁って言葉、知ってる？」

名前を呼ばれた少年は無邪気に笑った。

「知ってるよ」

「あんたが今、あたしにしていることよ」

「そうだね。僕はきみを閉じこめてるんだし」

「監禁罪っていう立派な犯罪もあるの」

「そうなんだ。それがどうかした？」

無垢な子どものような表情のまま、白羽は訊き返した。

「だってだれが知らないんじや、僕を捕まえようも裁きようもないよね」

「……あたしが通報したっていいのよ」

「する気もないのに？」

白羽は、髪と同じやわらかな色合いの瞳を電話に向けた。この一週間、電話線はつながれたままだ。

「漑はしないよ。できないよね、優しいから」

くすくすと笑いながら長い腕が伸ばされる。指を絡めたままの手

を引かれ、漑は白羽の抱擁のなかに落ちた。

十五歳の白羽は、十七歳の漑より頭ひとつ分大きかった。漑が平均よりもやや小柄なせいもある。自分よりも小さく、そして並んでいたはずの背丈は、とうに追い抜かされてしまっていた。

この一週間で、漑はすっかり抵抗することをあきらめた。するだけ無駄だと痛感したからだ。受け入れたのでなく心を削ぎ落としたと知っているくせに、白羽は幸せそうに目を閉じる。首筋に頬を寄せてくる仕種は、まるで仔猫のようだった。

「漑はここにいればいいんだよ。僕のそばに」

内緒話のようなささやきは確かに事実で、甘い声は鋭く漑の胸を刺した。

包みこむような腕は、こんなにも——冷たい。

馬鹿みたい、と漑はからからに乾いた声で呟く。

想いなどない。あるのはただ、無理やり形を歪められた関係だけだ。そんな虚しさすらわからぬ盲目に白羽は成り果てた。

だから漑はここにいます。

十七歳の夏休み、少女は少年に囚われた。

一日目、鳥籠の扉

二年ぶりの再会だった。

高校に入って二度目の夏休み、漑は父方の叔父の家に預けられることになった。今年のはじめから単身赴任していた父が体調を崩し、まるまる一ヶ月入院する羽目になったためだ。母は看病のために父の入院先へ向かい、県外の大学に通う兄もリゾート地での長期アルバイトに入るため帰省しないという。ひと月近く年頃の娘をひとりにさせることを懸念した母が、叔父に頼みこんだのである。

叔父は二年前に妻——父の妹に当たる叔母を亡くし、中学三年生の息子と生活していた。しかし、その叔父も仕事の関係でなかなか帰宅できず、実質、漑は従弟の白羽と夏休み限定のふたり暮らしをすることになった。

従姉弟同士とはいえ、同世代の異性とひとつ屋根の下で暮らすことに、漑はあまり乗り気ではなかった。そんな娘の不安を、母は笑って受け流してしまった。幼い頃の白羽は、母親によく似たとてもかわいらしい男の子で、気弱な性格もあって性別を間違われることが多かった。漑のあとを必死に追いかける姿に、兄の順じゅんいちよりもよっぽど姉弟のようだといわれたものだ。

母のなかの白羽は、今でも小さな漑の弟分のままなのだろう。漑は不穩の種を抱いたまま、叔父の家を訪ねた。

「久しぶりだね——漑」

出迎えた白羽の笑顔に、漑は種が割れる芽吹きのをはつきりと聞いた。

この男はだれだ。

そこにいたのは、確かに自分の従弟だった。

離れていた二年の間に、背丈が伸び、顔つきもずいぶん男らしい

ものにならなっていた。しかし甘くやわらかな、夏の陽射しに溶けてしまふような笑顔は、澪の記憶にあるとおりだった。幼い頃の面影をはっきりと見出すことができる。

——けれど。

「どうしたの？ 澪」

言葉を失つて立ち尽くす澪に、白羽は小首を傾げた。彼と目が合った瞬間に取り落としてしまった旅行鞆を足元から拾い上げてくれる。

「こんなところで話すのもなんだから、家の中に入らない？ 暑かったでしょ。冷たい麦茶でも淹れるよ」

白羽の手がそつと澪のそれを取る。夏だというのにひんやりとした体温に、澪はようやく声を取り戻した。

「……白羽？」

「うん？」

「白羽——よね、あんた」

掠れた澪の問いに、白羽は目を瞬かせた。それから呆れたような苦笑を返す。

「じゃあ澪には僕がだれに見えるの？」

「それは……」

澪は言葉を濁した。「だれに」と訊かれれば、「だれにも」と答えるしかない。

見知らぬ男。

こんな風に自分を見る目を、澪は知らない。暗く澱んだ、底なし沼のような深い闇を孕んだ目。覗きこんだ瞬間に引きずりこまれて、二度と浮き上がってこれないような。

白羽はこんな目をする少年ではなかった。陽に透けると琥珀色に輝く彼の瞳は、いつも無垢で透きとおっていた。純粹な感情を素直に表すまなざしの持ち主だった。

いや、違う。

過去をたどり、白羽と過ごした最後の一年間を思い出し、澪はき

つく眉根を引き絞った。大きく芽吹き、すでに胸の奥に根を張りはじめた不穩の正体に、今更になって気づく。

だからこそ、自分は彼から逃げ出したというのに。

「……そうね。あんたは、あんた以外のだれでもないわ」

いつの間にかしつかりと握られている手に、漣はため息とともに呟いた。白羽が笑う。

「そんなに僕、変わった？」

「馬鹿でかくなりすぎよ。偉そうに見下ろしやがって」

「しょうがないよ、成長期だもん。それに漣が小さいことにも原因が――痛っ」

「だれが小さいですってえ？」

漣はサンダルの踵で白羽の足を踏みつけた。白羽は「降参降参」と悲鳴を上げる。

「だいたい、呼び捨てにしていって言った覚えなんてないんだけど」

サンダルをどかしてやっても、きつい視線はゆるめない。しかし白羽は肩を竦めるだけだった。

「だってもう僕中三だよ？　ずっと小さい頃ならまだしも、この年齢でちゃんづけはきついよ」

「つい二年前までそう呼んでたくせに」

「呼ぶと漣が怒ったんじゃないか」

何げない言葉に、漣は小さく息を呑んだ。懐かしいじゃれ合いのような会話にごまかされていた空気が、すつと元に戻る。

白羽はそれに気づかぬように微笑んで、しかし先ほどよりもっと昏い瞳を向けてきた。

「中一の頃、僕が学校で『漣ちゃん』って呼ぶとすごく怒ったよね。恥ずかしいからやめろって」

「……そうだった？」

「うん。忘れちゃった？」

ぎりぎりと締めつけてくる指が痛い。皮膚に食いこむようなその

強さに、漑は唇を噛みしめた。

「忘れてない、わ」

この二年間、忘れたフリをしていた。蓋をして、目を背けて、そのままなかったことにしてしまいたかった。

そんな浅はかな思いさえ見透かされているようだった。

「なら、『漑』って呼んでもいいでしょ？」

表情だけは昔のままで白羽が顔を覗きこんでくる。とっさに後ろへ退きかけた体を、きつく掴んでくる手が引き止めた。

漑は眉間の皺を更に増やして従弟を見上げた。

「——好きにすれば」

挑発的な返事に白羽は目を細めた。一瞬浮かんだ彼の表情に、漑の背筋を寒気が走り抜ける。

それは、恐怖、だった。

「……じゃあそうするね」

白羽の笑みはどこまでも優しく穏やかだ。だからこそ、漑は刹那のおそろしさを拭えない。

「ああ、汗かいちやいそうだ。漑、家に入る。部屋に案内するよ」

ゆるりと手を引かれて玄関をくぐる。漑はその手をぐっと握り返し、偽りの笑顔を見据えた。

背後で扉が閉まり、耳を焦がすような蝉の声が途切れた。その音は、もはや二度と開くことのないように重く響いた。

二年前、澪と白羽

「——澪ちゃん！」

昼休みを告げるチャイムが響いて間もなく、勢いよく教室後方のドアが開いた。

弾むように自分を呼ぶ声に、澪はうんざりとため息をついた。

「みーお、ほらお迎えよ〜？」

隣の席で弁当を広げていた友人が、にやにやと笑いながら肩をつつついてくる。澪はその手をはたき落とし、声の主を振り返った。

「……なんの用、白羽」

「一緒にお昼食べよ！今日は天気がいいから外に行かない？」

従姉のきつい視線などかまいもせず、白羽は頬を上気させて笑った。その笑顔に、教室のあちこちから悩ましげな吐息が洩れる。

しかし澪は、眉間に皺を寄せただけだった。

「行くわけないでしょ。ていうか、教室に来るなって何度も言ったじゃない」

「……ごめんなさい」

澪の冷たい言葉に白羽は項垂れる。でも、とか細い声が続いた。

「澪ちゃんに、会いたかったんだ」

打ち捨てられた仔犬のような風情に、澪は思わず呆れた。とにかくさっさと追い払おうと口を開くよりも早く、友人が鼻息荒くまくし立てた。

「どうぞどうぞ、高本^{たかもと}くん。こんなやつでよければ好きなだけ持つてって！」

「ちよっ……」

「あんた、よくもこんなけなげな後輩につれない態度とれるわね！

羨まし——じゃなかった、先輩としてどうなのよ？」

あたしがいつこいつの先輩になったのよ、と言い返そうとして、

澪は口をつぐんだ。目の前の友人からだけでなく、教室中から非難

と嫉妬の入り混じった視線を感じたからだ。

いったい自分が何をしたというのか。澪はいつそう深く長いため息を洩らした。どう足掻いても自分は悪役でしかないことを痛感し、弁当とペットボトル入りの烏龍茶を持って席を立つ。

白羽は、先ほどまでの悲痛な表情が嘘のようににっこり微笑むと、友人に向かってぺこりと頭を下げた。

「澪ちゃんお借りします、先輩」

「うん……！」

友人は鼻を押さえて大きくよろめく。今度は彼女に注がれる羨望のまなざしに、澪は馬鹿馬鹿しくなつて白羽の脇をすり抜けた。

「あ、澪ちゃん待つて！」

慌てて追いかけてきた白羽は、隣に並ぶと何が楽しいのかくすくすと笑った。

「面白い先輩だね。僕、中学ってどんなところか結構不安だったんだけど、優しい人たちばかりで安心した」

「……あんたそれ、本気で言ってるの？」

「え？」

きょとんとした顔は本当に何もわかっていないようだった。無自覚だとしたら、このうえなくたちが悪い。

白羽が入学した当初、学校中が彼の噂で持ちきりになった。もちろんその原因は、テレビで見かけるアイドルよりよっぽど端麗な容姿である。

そんな人物に忠犬よろしく懐かれれば、注目を集めぬわけがない。白羽と比べ、あくまで平凡な澪に向けられる感情は、よくて好奇心、なかにはあからさまに妬みや嫉み、嘲りを見せる者もいた。だからいやなのだ。

幼い頃は知らなかった劣等感。長じるにつれ、それは薄まるどころか強くなる一方だった。並んだふたりを見る下世話な大人たちの目。

——白羽くんは本当にきれいねえ

——それに比べて澪ちゃんは……ねえ

——従姉弟ついても似るわけじゃないのね

美しくもないが醜くもない自分の容姿に、澪は不満などない。だが浮世離れた白羽の横にいれば、どうしても彼の引き立て役になつてしまう。あるいは無邪気な思慕を寄せられるほど、不釣り合いだと謂れのないそしりを受ける。その事實は、やがて白羽を疎む心に変わつていった。

彼を鬱陶しいと思うのは八つ当たりだとわかっている。澪に非がないように、白羽が悪いわけでもない。そばにいたからこそ、決して好意ばかりでなく理不尽な悪意を向けられていたことも知っている。だというのに優しくしてやれない自分に、澪は嫌悪感を抱いた。葛藤は苛立ちとなり、いつそう澪は白羽から離れようとした。しかしどんなに冷たく当たっても、彼は引き下がるところかますます食らいついてくるのだ。

おかしいと、澪は違和感を覚えるようになった。

いくら姉弟同然で育った間柄といえども、中学生になってまでべつたり張りついているだろうか。心身が男女の違いを覚えると同時に、少年少女はそれぞれの世界を作り上げていく。異性よりも同性、家族よりも友人と過ごす時間に安らぎや楽しさを見出す——少なくとも、澪はそうだ。

白羽が同級生の男子と話しているところを見たことがない。女子も芸能人に声をかけるような浮ついた様子で、とても対等な関係には思えなかった。いい意味でも悪い意味でも、白羽はクラスのなかで孤立していると想像するのはたやすい。

だが当の本人は不安も不満もないらしく、現状を改善しようとする気配は微塵も感じられなかった。

澪だけだ。

白羽はひたすら澪だけを求め、追いかけてくる。

「澪ちゃん？」

顔を覗きこんできた白羽の双眸が視界に入り、澪は我に返った。

薄茶色の瞳はどこか心配そうに見つめてくる。

「どうしたの？ 急に黙りこんで」

「別に、なんでもない」

「……やっぱり怒ってる？」

ふっと白羽の表情に影が差した。ガラス玉のような瞳の底に、途方に暮れる迷子を見つけ、漑は三月の冷たい雨を思い出した。

あのと看、漑の心を占めていたのは焦燥に似た衝動だった。手を伸ばさなければ雨に溶けて消えてしまいそうて、そんな少年の儚さに胸を掻きむしりたくなつた。

狂おしいほどの想いはなんだつたのだろう。

その答えは未だわからず、なぜか理解することがおそろしかった。

「……もういいわよ」

漑は三度目のため息をそつとこぼすと、ほろ苦い笑みを浮かべた。

「ほら、さつさと行かないと昼休み終わっちゃうでしょ」

「——うん！」

内から陽が射したように白羽が笑う。昔と変わらぬまぶしさに、漑は密かに安堵した。

足元が見えない暗闇を歩いているようだと思つ。それでも、雨のなかで胸を灼いた激情を忘れられないからこそ、突き放すことができないのだ。

伸ばされる手を取ることこそ鎖につながることを同義だと、十五歳の漑は知りようもなかった。

三日目、鎖された箱庭の名前

「どこに行くの？」

降ってきた声の低さに、澪は自分が逃れようのないことを思い知った。

今まさにノブを回して玄関のドアを開けようとしていた手は、自分のものより大きなそれに上から押さえつけられている。

もう一方の手をドアにつき、背中に覆い被さってくる白羽のひんやりとした気配が肌を刺す。澪は喉の奥に詰まっていた息をゆっくり吐き出した。

「……友達と映画観にいくの」

「友達ってだれ？」

間髪なく返される問いの鋭さに、喉元に刃を突きつけられているような気分になった。

叔父の家にやってきて三日目。

この日、澪は高校の友人と映画を観に行く約束をしていた。一年近く前から注目されていた話題作で、封切になったらずに観にいくと夏休み以前から話していたのだ。だから他の予定は入っていないし、白羽に引き止められるような理由もない。

だが白羽の声には、そんなことを通り越して足が凍りつく威圧感があった。

「だれって、学校の友達」

「男？ 女？」

「女よ。——ねえ、放して」

澪はそこではじめて振り返った。

「急いで行かないとバスに乗り遅れちゃうの。帰るときは連絡するから」

白羽は無表情だった。冷たく硬質な顔つきに息苦しさを覚えながらも睨み返す。

「だから放して」

「……いやだつて言ったら？」

うつすらと白い面に笑みが滲む。それは決して優しいものではなかった。

「行かせないって言ったらどうする？」

「なに、それ」

漣はぎゅっと拳を握りしめた。冷たい汗に掌がぬめる。

「あたしがどこ行こうと、白羽には関係ないでしょ。あんたに束縛されなきゃなんない理由なんて、あたしにはないわ」

張り詰めた少女のまなざしに、白羽はふうつとため息をこぼした。ドアについていた手を滑るように動かし、腕の中に囲った漣の頬をそっと撫でる。

「漣は、わかってないよ」

ささやくような声音は、場にそぐわずどこかさびしげだった。氷のような瞳の奥で燦ぶる熱に、漣は心臓を射抜かれた。

「ちつともわかってない。きみが、そばにいるって言ったのに」

「そんなの、いつの話よ」

窒息してしまいそうになりながら、漣はワンピースの胸元をきつく握った。

「もう三年も前でしょ、いつまで子どもじみたこと言ってるのよ。あんだだつて言っただじゃない、もうそんな年齢じゃないって。だったらいい加減、他人のあと追っかける真似なんてやめて。もううんざりなのよ！」

叫んだ瞬間、痛いほどの強さで腕を引かれた。

「——ッ」

サンダルが踵が引つかかってつんのめる。それでもぐいっと家の中に引き戻され、漣は転ぶようにサンダルを脱いだ。

「いた、痛いってば、白羽！」

手首を掴んだ白羽は乱暴な足取りで玄関ホールを渡り、階段を昇っていく。どんなに言葉をぶつけても無言の背に、頭から冷水を浴

びせられたような悪寒が襲ってきた。

「白羽、放して……放してっば！」

最後はほとんど悲鳴のようだった。白羽は二階へ上がると、澪が使っている部屋のドアを開け、小柄な彼女を投げこんだ。

「きゃっ」

勢いよく床に倒れこむ。顔を上げた澪は、非難の言葉を息と一緒に呑みこんだ。

戸口を塞ぐように立った白羽の目からは、ごっそりと感情が抜け落ちていた。

「——許さない」

呟きが乾いた音を立てて落ちる。

「逃げるなんて、裏切るなんて、僕は許さないよ」

「し、らは」

ぽっかりと穿たれた穴のような双眸の奥で、冷たい鬼火が燃えている。青ざめたその炎は、いつか自分を焼き尽くすだろう。

ねっとり爪先を舐める鬼火の舌先を、澪は想像した。

「嘘つきになればなかったことにできるなんて、思わないで」

すつと白羽の目が細められた、その瞬間、バンツと弾けるような音を上げてドアが閉まった。

「白、羽、白羽、開けて！」

澪はドアにすがりついた。がちゃがちゃとノブを回し、体当たりしても開かず、何度も何度も拳で叩く。

「白羽、聞こえてるんでしょ。開けなさいよ！」

「……澪が」

返ってきたのは、ひどく静かな声だった。

「澪が自分で言ったことの意味を思い出したら、出してあげる」

——そんなの、知らない。

ドアに拳をついたままずると崩れ落ち、澪は床に座りこんだ。額をドアに押しつけるようにして頂垂れる。

どうしてこんなことになってしまったのか。だれよりも近くに

たはずなのに、白羽の心がわからない。

悲しみとも恐怖ともつかぬ感情に吞まれ、漣は声にならない嗚咽を洩らした。

結局、彼女は丸一日部屋のなかに閉じこめられていた。

さんざん泣き喚いて、部屋のなかのものに当たり散らして、どれほど罵倒をぶつけようと開かぬドアに疲れ果て、いつの間にか眠ってしまった。どんな夢を見ていたのか憶えていないが、意識が現実に取り戻された直後の浮遊感はひどく気だるいものだった。

ああ、夢のなかですら逃げられない、とぼんやり思った。

だから漣は、「もういい」と呟いた。

「もういい。どうだっていい……あんたの好きにすればいい」
いくら言葉を尽くしたところで、白羽の思いを理解することなどできない。

だったら何もかも投げ出してしまいたい。

ひと粒だけ残っていた涙がころりと転げ落ちたのを知ると、音もなく目の前のドアが開いた。

白い裸足の先からたどるように視線を上げていくと、どこか虚ろな表情の白羽と目が合った。

彼は思い出したように微かに笑うと、膝を折って床に横たわったままの漣を抱き起こした。

「うん……だから漣、僕のそばにいて」

閉じこめられたときの荒々しさなど少しも感じさせぬ動作で抱きしめられる。広い肩口に力なく頭を預けた漣は、応えずに瞼を下ろした。

白羽はどんな箱庭を作ろうとしているのだろうか。漣にわかるのは、それは決して楽園ではないということだけだった。

十五日目、宛先不明のSOS

ブーツとテーブルから伝わってきた振動に、澪は伏せていた顔を上げた。

規則的なバイブレーションをくり返す携帯電話を手に取り、待受画面を開く。『メール一件』の表示をクリックすると、受信されたばかりのメール画面が現れた。

『この間は夏風邪って言ってたけど大丈夫？　もしよさそうだったら、改めて映画行かない？』

澪はため息をついた。メールの送り主は、白羽に閉じこめられてすっぱかしてしまった約束の相手だった。友人の人柄を表すように、文章の最後には心配そうな顔文字がついている。

あのときは、急な夏風邪を引いて寝こんでしまったとごまかしたのだ。あれからもうすぐ二週間が経ち、夏休みも半分を終えようとしている。その間、澪はほとんど外部と連絡を取っていなかった。

もともと彼女は、自分からメールや電話をするタイプではない。何より、今は白羽の目がおそろしかった。電話線が抜かれずにいるように、彼は何も言わない。だが、だれかに連絡する——助けを求める素振りを見せたら、穏やかな仮面の下から獣の牙が食らいいついてきそうな気がした。

澪は携帯電話を握りしめ、ゆっくりとボタンを押した。

『4』を一回、『3』を三回、『2』を四回。再び『4』を、今度は四回。

『たすけて』

変換待ちの点滅をくり返す四文字をじっと見つめる。まるで子どもが書いたようにつたない言葉。

——自分はだれかに助けてほしいのだろうか？

不意にこみ上げてきた疑問に、澪は愕然とした。この吐き気のするような牢獄から脱け出したいと思うのは当然ではないか。白羽の

行いは明らかに間違っている。

だが彼がおそろしいから、逃げるできない。

……本当に？

本当に、自分は白羽をおそれて逃げられないのだろうか。恐怖だけがここに囚われている理由なのだろうか。

助けてほしい。救ってほしい。

だれ、を？

「――」

茫然と見開かれた瞳に何かが映りかけたそのとき、階下から玄関のドアの開閉音がのぼってきた。

漑はゆるりと瞬いた。

夕食の買いものに出かけていた白羽が帰ってきたのかと思ったが、待受画面に浮かんた時刻は、彼が出かけてからまだ三十分しか経っていないことを告げていた。

携帯電話の画面を閉じて立ち上がる。漑は部屋を出ると、階段を下りてダイニングに向かった。

ダイニングからキッチンへと続く出入り口の向こうに、白いワイシャツの背中が見えた。ほっそりとした後ろ姿は白羽とよく似ているが、少年よりもくたびれた印象が滲んでいた。

「――叔父さん？」

そつと呼びかけると、水を飲んでいた男性は濡れたグラスを置いて、こちらを振り返った。細い毛筆ですうつと描いたような双眸を小さく瞬かせ、「ああ」と声を洩らす。

「漑ちゃんか……ただいま」

「おかえりなさい」

見るからにサラリーマンといった風情の男性は、外でもない白羽の父親であり、漑にとっては叔父に当たる高本廣世^{ひろせ}だった。

どこか眠そうな目元とあまり動かない表情のせい、廣世は茫洋

とした、印象の薄い顔立ちをしていた。際立つような白羽の美貌は、間違いなく叔母の紗夜子譲りである。しかし、すらりとした立ち姿を比べると、ああやつぱり親子なんだと納得する。

「今日はずいぶん早いんですね」

「思いかけず仕事がひとつ片づいてね。半日有休をもらったんだ。

……白羽は？」

「夕飯の買いものに行ってます。お昼、まだですか？ 炒飯の残りがあるから、あたため直しましょうか」

「ああ、お願いできるかな」

ネクタイをゆるめながら廣世は頷いた。漑は彼と入れ替わりにキッチンへ入ると、冷蔵庫からラップのかかった皿を取り出し、電子レンジにかけた。

置きっ放しのグラスを軽くすすぎ、冷えた麦茶を注ぐ。すぐに電子レンジがピーツと甲高く鳴った。

「お待たせしました」

「ありがとうございます」

ラップを外した皿にスプーンを添え、グラスと一緒に運ぶ。廣世はきちんと手を合わせてからスプーンを手を取った。こういうところも似ている。

漑は叔父の向かい側の席に座った。

「シーチキン入り炒飯か。漑ちゃんが作ったのかい？」

「白羽ですよ」

叔母亡きあとの高本家の家事は、白羽が一手に引き受けている。

漑がやってきてからもそれは変わらない。白羽は、漑が家事を手伝うことを決して許さなかった。

廣世はスプーンを持つ手を止め、わずかに目を伏せた。

「そうか……」

ため息をつくような声だった。

「……そうだね。この味は、あの子のものだ」

どこか翳りを帯びたまなざしが炒飯に落ちる。

「今年に入ってから、特に忙しくてね。白羽の手料理をともに食べるなんて、久しぶりだ」

澪は、白羽がいつもふたり分の食事しか用意しないことを思い出した。最初の頃は気になったが、朝食時にさえ廣世と顔を合わせることはほとんどなく、いつしかそれがこの家の日常なのだと納得した。

だが今思えば、それはとてもさびしいことではないだろうか。

叔母を交通事故で喪ってから、白羽はずっとこの家にひとりぼっちだったのだ。だれもいない、暗く、冷えきった部屋の中で立ち尽くす少年の姿を思い浮かべ、澪は言葉にならない声で喉を詰まらせた。

――僕のそばにいて……

「……情けない話だけど」

記憶のなかの白羽の声と、目の前の廣世の声が重なった。

「紗夜子が死んで、白羽とふたりつきりになってから……あの子にどう接すればいいかわからないんだ」

「え……」

目を瞠る姪に、廣世は自嘲めいた笑みを薄く浮かべた。

「紗夜子がいなくなるまで、僕はずっと白羽のことを彼女に任せっきりだったんだよ。授業参観に行ったこともないし、運動会の応援もしたことがない」

「でも、それはお仕事が忙しいから……」

「もちろん本当だったけど、でもそれを言い訳にして、紗夜子に甘えていた部分もあったと思う。紗夜子は文句ひとつ言わずに、いつでも笑って送り出してくれたから」

思い出に残る叔母の紗夜子は、いつも明るく笑っていた。子どもがいるとは思えない、少女のように可憐な女性だった。だがそれ以上に、内面から溢れ出る輝きが人を惹きつけてやまなかったように思う。

白羽に比べてかわいげがあるとは言いがたかった自分も、屈託な

く慈しんでくれた。遊びにいくたびに作ってくれた菓子の甘く優しい味が、じわりと甦る。

「そんな父親だったから、僕は息子のことをまったく知らないんだ。どんなことを話せばいいのか、どう向き合えばいいのか……わからないんだよ」

廣世の顔から笑みが消え、深いため息が落ちた。

「……今思うと、紗夜子は僕と白羽をつなぎ止めていてくれたんだね」

「叔母さんが？」

「僕は一度きつかけを失うとなかなか近づいていけない性格だし、子どもの頃の白羽は臆病で、身内にすら人見知りしていたからね。そんな僕らの手を彼女が引っ張って……ひとつの『家族』にしてくれていたんだと思う」

それでは、まるで今のふたりは家族ではないと言うようだ。

だが一方で、ある意味真実なのかもしれないと呟く声があった。同じ家で暮らしていても、ともに過ごす時間のなかで重ねていく心がなければ、家族とはいえないのではないか――。

「だからね、澪ちゃんには本当に感謝しているんだ」

「……え？」

不意に上がった自分の名前に、澪は戸惑った。

「紗夜子が死んで、ひどく塞ぎこんでいた白羽が立ち直れたのも、きみがそばにいてくれたからだと思うんだ。あの子は昔からきみを慕っていたから」

「そんな……あたしは、別に」

廣世のやわらかな視線に、思わず俯いてしまう。膝の上で握りしめた拳に気づかぬまま、彼は続けた。

「だからその分、澪ちゃんが高校に行ってしまうって気落ちしてしまったようだね。もともとの性格もあるんだろうけど……あまり学校でうまくいっていないようなんだ」

いつも自分の背に隠れていた小さな白羽。

まるでそれだけしか見えないように、ひたすら澪を追いかけてきた十三歳の白羽。

廣世の存在を忘れたように振舞い、澪を閉じこめた十五歳の白羽。いったいいつから、なぜ澪だけを求めるようになったのか。

「だけど今回、お義姉さんから澪ちゃんのことを頼まれて……夏休みの間だけでも白羽をひとりにしなくて済むと、安心したんだ」

澪ちゃん、と優しく、どこかすがるような声で呼ばれた。のろのろと視線を上げると、廣世は淡く微笑んだ。

痛みを堪えるような表情だった。

「虫のいい、自分勝手なお願いだと思う。でも、どうか、せめてこの夏が終わるまで白羽のそばにいてやってくれないかな」

三年前のあの日。

白羽は冷たい雨の向こうに、何を——だれを見ていた？

「きつと僕では駄目なんだ。あの子自身が望む相手ではないと……紗夜子のように」

——ああ、そうか。

何度もくり返されたはずのその名前は、まるで氷の楔のようだった。

この牢獄のなかで、白羽が一度たりとも彼女のことを口にしていないことに、澪はようやく気がついた。

十八日目、ピーター・パンの見た夢

漑はダイニングの壁にかけられたカレンダーを睨んでいた。

満開の向日葵を写したカラー写真の下、数えられる日数はすでに八月の半分を切っていた。夏の終わりは、確実に近づいてきている。

——このままでいいはずがない。

廣世の話を聞いてから、漑の胸にはもやもやとした、焦りのような思いがわだかまっていた。時間が経てば経つほど濁りは深くなり、怒鳴り散らしたい衝動がこみ上げてくる。

廣世も、そして白羽も、うわべばかりを見つめている。漑が白羽のそばにいたところで、ほんのいつとき、彼の孤独を薄めることしかできないのに。

白羽の抱える闇——漑に対する執着を掻き立てる要因そのものを溶かしきらなければ、本当の解決にはならない。

痛みにも似た苦しさを覚え、漑は目を伏せた。

ようやくわかった気がした。

囚われていたのは漑ではない。白羽だ。

ずっと、ずっと、三年前のあの日から。白羽は今もなお、悲しみが凍ったような雨のなかにいるのだ。

だが、彼を置き去りにしたのか。

「……馬鹿みたい」

握りしめた拳を額に押し当て、漑は呻いた。

「本当に、どうしようもない、馬鹿よ」

「——だが？」

微かな冷笑を含んだ声が首筋に落ちた。するりと後ろから伸ばされた腕に包みこまれる。

不意に現れた従弟に、漑は驚かなかった。

「漑はひどいなあ。馬鹿馬鹿って、最近それしか聞いてない気がする

る」

くすくす笑いながら白羽はすり寄ってくる。ぬくもりを重ねて、けれど胸に広がるのは寒々しさだけ。

この空虚な絶望の意味も、今なら理解できる。

「……暑苦しいんだけど」

どうしようもなく泣きたくなって、だが澪は泣けなかった。声を低めて、突き放すような言葉でごますしかない。

——澪は……優しいから

優しくなどない。吐き気がするほど臆病で、愚かな人間だ。

——澪は、わかってないよ

ああ、そうだ。

自分はわかっていなかった。何も、わかっていなかった。

己自身の想いも。白羽の、本当の願いも。

「僕は、このままがいい」

白羽は深く息を吸いこむように答えた。年頃の少年には似合わない、素朴な石鹸の香りがした。

「ずっと、このままがいい」

澪が何を見ていたのか、白羽は知っている。

この夏がいつか終わることを、知っている。

どんなにおそろしい目をしていても、どんなに澪より力が強くて、彼はまだ子どもなのだ。

小さな世界しか知らない、守られることしか知らない男の子。

「ねえ、白羽」

「ん？」

「あんた、ピーター・パンの話憶えてる？」

途端に白羽の腕が強張った。

澪はそれに気づかないふりをして、言葉を続ける。

「子どもの頃さ、この家に泊まりにきて夜になると……叔母さんがよく絵本を読んでくれたじゃない」

母はあまりそういうことをしてくれなかったから、白羽と枕を並

べて耳を澄ます寝物語がとても楽しみだった。

王子様の口づけで目覚めた眠り姫も、ガラスの靴を落として幸せになった灰かぶりも、すべて紗夜子が教えてくれた。

「あんた、ピーター・パンが一番のお気に入りだったわよね。何度も何度も叔母さんにねだって、あたしは別の話が聞きたかったから喧嘩になったこともあっただけ」

「……漣」

「しまいにはあんたが泣き出して、結局いつもみたいにあたしが折れたのよね。叔母さんも呆れて——」

「漣ッ」

はじめて聞く声だった。

間近で怒鳴られて耳の奥が痛んだが、漣は眉ひとつ動かさなかった。

「もう、いい」

苦しいほどの強さで、きつく抱きしめられた。

「そんな昔のこと、もうどうでもいい。僕は——僕はただ、漣がそばにいてくれば、それだけで」

「……あんたさ、ピーター・パンになりたいって言ってたわね」

漣はもう一度カレンダーを見た。正しくは、三日後の日付に下に書きこまれた言葉を。

「今でも、そう思ってる？」

肩に震える吐息を感じた。何か言おうとして、答えられぬまま口を閉ざしてしまったように。

永遠の少年、いつまでも大人にならないピーター・パン。

だが、ウェンディは大人になった。

ネバーランドで常若の夢を見続けるのではなく、とめどない時の流れのなかへ帰ることを選んだ。

女の子は男の子より早く大人になるのよと、紗夜子は笑っていた。きつと、漣も同じだ。

「ねえ、白羽」

だから、選ぶ。

「——デートしよう」

「……え？」

顔を上げる気配に、漑は白羽を振り仰いだ。何を言われたのかわかっているのか、秀麗な面に間抜けなほどぽかんとした表情を浮かべている。

「どこにも出かけるなってんなら、あんたと一緒に行けばいいんだわ」

三日後の日付を指差すと、ようやくゆっくりと双眸を瞬かせた。

「花火、大会？」

漑はまっすぐ白羽を見据えた。

「光栄に思いなさい。エスコート役に指名してあげるわ」

「……いいよ」

ゆるゆると口端を持ち上げ、白羽は笑った。

どこかぎこちない、貼りつけたような笑顔だった。

「一緒に、行こう」

——この選択は、白羽を傷つけるものでしかない。

それでも。

まやかしの救済者なんてまっぴらだ。

だから漑は、破壊する。

夏の終わりのカウントダウンが、はじまった。

二十一日目、花火が消えるまで（1）

夏の夕暮れは透きとおるような色をしていた。

残照に白く霞む空は薄明るく、しかし花火大会の会場である河川敷には夕闇が濃い影を落としていた。肌を撫でる風はねっとり絡みつくように重い。人混みの熱気と相俟ってむせ返りそうなほどだ。自分から言い出したにも関わらず、澪はすでに帰りたくて仕方がなかった。礫のような石がごろごろ転がる河原に、踵の細いサンダルを履いてきたのは間違いだった。歩きにくいうえに、ごった返す見物客の隙間を縫うようにしか進めず、何度も人にぶつかりそうになった。

「澪、大丈夫？」

先を行く白羽が心配そうに振り返る。澪はうんざりして答えた。

「ぜんぜん大丈夫じゃないわよ……なんなのよ、この混雑ぶりは。こんなに混むようなイベントだった？」

幼い頃、幾度か白羽とともに叔母に連れてきてもらったときは、これほどの賑わいではなかった気がする。川沿いの土手道どころか橋の上にまで見物客が溢れ返り、河川敷に至る道路では局地的な渋滞が発生していた。

「ここ二、三年で、ずいぶん盛大になったんだよ。ローカルだけど、テレビでも取り上げられたしね。このあたりでやる夏のイベントだと、一番大きいんじゃないかな」

「……道理で」

澪はため息をついた。どうやら決着の舞台を選び間違えたようだ。こんな場所では、落ち着いて話などできそうにない。

「澪」

彼女のため息を拾い上げるように、白羽が呼んだ。

「ちよつと遠いけど、静かに花火を見れるところがあるんだ。そこに行く？」

「……あんた、そういうことはもつと早く言いなさいよ」

思わず睨むと、白羽は困ったように笑った。

「僕も久しぶりに来たから、さっき思い出したんだ。ごめんね」

その表情がひどく儂く映り、漑は口をつぐんだ。

暗い水色の闇に、少年の姿は灰白く浮かび上がるようだった。青いボーダー柄のポロシャツにゆったりとしたジーンズ、履きこんだスニーカーというありふれた出立ちだが、どこまでも整った横顔にすれ違うだれもが目を奪われる。一緒に歩く漑以上に視線を感じているだろうに、気にもしていない様子だった。

人の多い場所に出かければ、こんなことは当たり前なのだろう。慣れてしまったのではなく、慣れるしかなかったのだ。

優しく背に庇ってくれた人は、もういないから。

「……白羽」

「なあに？」

漑は手を伸ばし、華奢なようでしたっけとした造りの手を捕まえた。ほんの一瞬、白羽の肩がびくりと震える。

おそれにも似た驚愕に強張る顔から目を逸らし、漑は言い訳を口にした。

「はぐれたら、めんどくさいから」

素直になれない気持ちをこめて、手を握った。

白羽は黙りこんだ。漑の心の後悔が滲みはじめた頃、そっと、ためらうような強さで握り返された。

漑は顔を上げた。

視線が合うと、白羽はくしゃりと笑った。

「……うん」

それは、泣き顔のようだった。

唇を噛みしめ、漑は白羽の手を引いた。

「あんた、昔っから迷子になるんだから」

「うん」

「……本当に、世話が焼けるんだから」

「うん」

子どもの頃のように手をつないで、ふたりは歩き出した。

かつて、自分のそれより小さくやわらかかった掌はどこにもない。舌つたらずな甘い呼び声も、あどけない笑顔も。

苦しいほどの切なさ、喉が詰まりそうだった。

無邪気だった日々への愛惜は、確かにこの胸にもある。だが漣が本当に欲しいのは、二度と戻らぬ思い出ではなかった。

今だけだ。

今だけ、いずれ上がる花火が消えるまで。

この熱を独り占めさせてほしいと、漣はだれともなく許しを乞うた。

白羽に手を引かれるままやってきたのは、河川敷から少し離れたところにある住宅街だった。

見物客の行き交う大通りを外れた途端、喧騒がすっと遠ざかった。それほど奥へ行かぬうちに、白羽は「ここだよ」と指差した。

ふたりの目の前には、長い石段が続いていた。石段の先は、ずいぶん上に立つ鳥居の向こうの闇に吸いこまれていた。

「神社？」

「うん。ちょっとした高台になってて、社殿の裏手から河川敷を見下ろせるんだ」

あたりはすっかり夜の帳に包まれ、鳥居の奥には木々の影が黒々と広がっている。今にも覆い被さってきそうな重々しい闇に、漣は思わず押し黙った。

白羽が首を傾げ、顔を覗きこんでくる。

「もしかして、怖い？」

からかうような色を滲ませた口調に、漣は彼の向こう脛を蹴った。「いってえ！」

「子どもじゃあるまいし、そんなわけないでしょ。さっさと行くわよ」

「図星指されたからって八つ当たりしないでよ……」

「『口は禍の門』って言葉を憶えときなさい」

他愛ないやりとりをしながら、ゆっくり石段を昇っていく。手すりも明かりもないなかで、つないだ手だけが頼りだった。

石段を昇りきると、さほど広くはない境内に出た。濃い木の下闇の奥に小さな社殿がひっそりと佇んでおり、白羽はそちらに向かつて歩を進める。

「虫除けスプレー、してきてよかったね」

「してなかったら藪蚊に食われ放題だったわ」

闇がいつそう深くなると、むっとするような夏草のにおいがふたりを押し包んだ。空気はひんやりとしていて、チュニツクの下の滲んだ汗が冷える不快感を覚えた。

「こつちだよ」

それほど進まぬうちに、不意にぽかりと暗がりが晴れた。藍色の夏の夜空が広がり、その下に家々の灯と、もっと向こうに大きな川の流れが見える。

「す……」

目を睨ると、白羽は嬉しそうに笑った。

「ここなら何にも邪魔されずに見られるでしょ？」

「よくこんな場所知ってたわね」

ひと呼吸の沈黙を置いて、白羽は「うん」と小さく頷いた。

「家にいるのがつらくて……ひとりでいるんなところを歩き回ったことがあったんだ」

不意打ちのような告白に、澪は息を呑んだ。

白羽は遠くを見つめるようなまなざしを町並に向けたまま、とつとつと語った。

「ひとりぼっちはいやだったのに、どこへ行っても人の目が煩わしくて、痛くて……逃げ回ってた」

「……白羽」

「だけど——今は、澪がいてくれるから」

澪を振り返り、白羽は淡く微笑んだ。

「澪がいるから、さびしくなんてないんだよ」

その瞬間、澪の心は凍りついた。

ひび割れ、限界に達しかけていた想いが、甲高い悲鳴を上げて碎け散る。

澪は唸るような声で呟いた。

かつて、白羽自身が彼女を詰ったように。

「——嘘つき」

絶句する白羽を、斬りつけるような激しさで睨めつける。

「み、お？」

「嘘つきはあんたよ。あたしがいいばい？ そんなこと、ホントは思ってたんじゃないくせに」

少年の顔が青ざめていくのが夜目にもわかった。しかし、澪の激昂は止まらなかった。止めようとも思わなかった。

「あんたがそばにいてほしいのは、あたしじゃない。あたしはただの身代わりよ」

「みお……澪」

「そばにいてほしい人はもういないから、あんたは一番近くにいたあたしでさびしさをごまかそうとしたのよ。あの日、あたしが『そばにいてほしい』って言ったから」

「——ッ、澪ちゃん！」

悲鳴が弾けた。

白羽は大きく肩を震わせた。いやいやをするように首を横に振る。

「澪ちゃん、澪ちゃん……お願い、もうやめて……」

「やめない」

澪は冷酷に続けた。

「あんたのおままごとにつき合わされるのは、もういやなの」

茫然と澪を見る瞳は、傷ついたガラスのようだった。しかし、怯

むわけにはいかなかった。

白羽が望む彼女のように、優しくなんてなれないから。

「あたしは——紗夜子叔母さんじゃない」

ひゅ、と白羽の喉が鳴った。

その美しい、悲しいほど叔母によく似た顔からは、もはや透きとおるほど血の気が引いていた。

「ぼく、は……」

「あんたがそばにいてほしい人は、叔母さんよ」

「ち、違……僕は、澪ちゃんに」

ここまで来て偽ろうとする白羽に、澪は笑った。

どうしようもなく泣きたくて、それでもこぼれない涙の代わりに、笑った。

「ねえ、白羽」

ずっと目を背けてきた答えがある。

冷たい雨に消えてしまいそうだった少年を抱きしめた理由。翳りはじめた彼の心をおそれながらも、突き放せなかった理由。歪んだ牢獄から逃げ出さなかった理由。

「あんたにとって、あたしは何？」

「え……」

戸惑いに瞳を揺らす白羽に、澪は押し殺した声を洩らした。

「あたしは、あんたの母親にかなりたくない。昔みたいに、お姉ちゃんに戻りたいわけでもない」

この世のものではないような美しい少年を雨のなかに見つけたときから、願うことはただひとつ。

その透明なまなざしが、欲しい。

「ずっと、あんたのことが好きだった」

こぼれ落ちそうなほど見開かれた双眸に自分だけが映りこんでいることに満足しながら、澪は白羽の胸倉を掴むと、力いっぱい引き

寄せた。

焦がれ続けた唇に、噛みついた。

——そして、火花が上がる。

二十一日目、花火が消えるまで（2）

ドオン、と夜空に咲いた花火がふたりを照らした。

「……っ」

その音に我に返ったように、白羽の肩が震えた。次の瞬間、澪は力いっぱい突き飛ばされた。

「きゃっ」

思わず尻餅をついた澪は、白羽を睨み上げた。彼は口元を押さえ、信じがたいものを目にしたような顔をしていた。

ひどく嗜虐的な感情とともに、澪の口端に嘲笑が滲む。

「驚いた？」

「なんで……こんな」

「したいと思っただけだよ」

澪は立ち上がってチュニツクの裾をはいた。

一歩近づくと、白羽の表情がはつきりと強張った。しかし容赦なくその腕を捕まえる。

「み……おちゃん」

怯えきったまなざしに、澪はふ、と息をつくように表情をゆるめた。

「あたしが怖い？」

白羽が小さく息を呑む。

「そ、そんなこと」

「あたしは、ずっとあんたが怖かった。……でも本当は、叔母さんが死んであんたが壊れちゃうことが、何より怖かった」

自分の本当の想いに蓋をして、目を背け、ついには白羽にすら背を向けて逃げ出した。そうすれば、決して叶わない恋に打ちのめされることも、無力な自分を思い知らされることもなかったから。

比喻でも冗談でもなく、白羽にとって紗夜子は世界のすべてだった。

最初から、こんなにもちつぱけな自分が敵うはずがなかったのだ。
「それなのに、あたしは何もできない。壊れていくあんたを見てるしかない。……叔母さんの身代わりとして」

何度も何度も味わった、苦く虚ろな悲嘆が再びこみ上げる。
喉が引きつったように声が掠れた。

「叔母さんの代わりになんてなれないって、一番あたしがわかってる。それなのに、あんたは笑いかけるのよ。あたしにじゃない。あたしの向こうにいる——叔母さんに」

「澪、ちゃん……」

澪は白羽の腕をきつく掴んだ。

「ねえ、白羽……『あたし』を見てよ」

幾度も上がる花火は、少年の頬を淡く染めては溶けるように消えていく。澄んだ瞳の底に映りこむ光の残影を、澪は場違いなほどきれいだと思った。

「僕は……」

白羽の顔が歪んだ。

「僕、は、……ただ、そばにいてほしかっただけなんだ」

頑なにくり返す、その言葉が何よりの肯定なのに。

なんて、愚か。

澪は優しく、冷たく問うた。

「だれに？」

今度こそ、白羽は言い訳を失った。茫然とした顔は、闇に溶けて消えてしまいそうなほど蒼白だった。

——ああ、これで本当に、完敗だ。

悲しみの膜が静かに心を包みこんだ。その冷たさが胸の内を撫で、澪は目を伏せた。

力を抜くと、少年の腕はあっけなく手中から逃げた。からっぽの掌をきつく、痛みが走るまで握りしめる。

「澪……ちゃん？」

戸惑うような白羽の声に、澪は俯いていた視線を上げて、笑った。

「これでもう、間違えたりしないわよね」

自分も彼も、どうしようもない本当の望みを思い知った。そしてそれは、決して交わらず重ならない。

もう、一緒にはいられない。

「終わりにしよう、白羽」

「な……にを？」

白羽の面に恐怖が広がっていく。それを、どこか遠くで見ているようだった。

「全部。何もかも、夢だったのよ」

きつと、澪たちは幼すぎた。

自分の願いばかりに焦がれて、相手を思いやることも知らない子どもだった。だからこそふたりの関係はいびつで、最初から破綻していた。

最後に残るような尊い何かは、はじまってなどいなかった。

「もうこれ以上、あたしは傷つきたくない。傷つけたくない。だから、ここでおしまい」

いつしか花火大会はファイナーレを迎えていた。

有終の美を飾る特大の花火が、ひと際明るく夏の夜を照らす。

その音を聞きながら、澪は告げた。

「さよならよ、白羽」

少年の唇が震える。

それが言葉を紡ぐ前に、澪は踵^{かかと}を返し、全速力で駆け出した。

「……………ッ、澪ちゃん！」

悲鳴のような声を振り切って暗がり飛び出す。境内を突っ切り、まるでよつに石段を駆け下りた。

そのまま住宅街を走り抜けようとするが、途中でサンダルが脱げかけ、アスファルトの上に転んだ。

「……………」

とつさについた掌に熱が走り、漑は息を呑んだ。なんとか立ち上がろうとして——こみ上げてきた鳴咽に、そのまま崩れ落ちた。

漑は大きく背を震わせた。ぼたぼたと溢れる涙の奥から、引きつった泣き声がこぼれる。

悲しくて悔しくて切なくて、このまま死んでしまいたいそうだった。

溺れるような涙に、自分は馬鹿みたいに白羽が好きなのだを知る。救いようのない事実はナイフとなって更に胸を抉った。

白羽が、好きだ。

だから自分を見てほしかった。彼を救いたかった。笑ってほしかった。

ただ、それだけ。

それだけが、漑のすべてだった。

——これが恋だというのなら、なんて痛い。

いつの間にか、花火の音が途絶えていた。もう何も聞こえない。

夢が、終わった。

二十七日目、だれも知らない恋の終わり

コンコン、ときこちなくドアが叩かれた。

薄手のタオルケットにくるまり、ベッドの上につづくまった漑は、背中でその小さなノック音を聞いた。薄暗い部屋の中、じっと息を詰める。

ドアの向こうに立つ気配は、まるでこちらの様子を窺っているように動かない。薄氷の上を歩くような緊張がぴんと走り、漑は心臓が固く縮こまるほどの息苦しさを覚えた。

落胆のような、安堵のようなため息がひとつ。

気配は静かな足音を立てて一階へと下りていった。ダイニングのドアが閉まる音を聞き、漑はようやく全身の力を抜いた。

ベッドの隅に放り投げていた携帯電話の画面を開くと、時刻は十二時のサイレンが鳴ってから三十分が過ぎようとしていた。時刻を確認した途端に虚しい空腹感がこみ上げてきたが、漑はそれを無視して頭まですっぽりとタオルケットを被った。

ダイニングでは、白羽がひとりきりの昼食を摂りはじめているはずだ。漑の分の食事が冷めていく傍らで黙って箸を動かす白羽の姿が思い浮かび、氷の棘が冷たく胸の奥を刺した。それでも、漑にはこの部屋から出ていく勇氣はなかった。

どんな顔をして白羽の前に立てばいいのか、わからない。

花火大会の夜を境に、ふたりの日々は一変した。言葉を交わすどころか顔を合わせることもほとんどなくなった。食事の時間でさえも、白羽が先に食べ終えて部屋に戻るのを確認してから、ようやく漑がダイニングに入る。同じ屋根の下で生活していながら、もはやともに暮らしているとはいえなかった。

漑は徹底的に白羽を避けていたし、白羽もまた、彼女の拒絶を受け入れて近づいてこようとはしなかった。ガラスのように透明で、しかし決して砕けない硬質な膜がふたりを隔ててしまっていた。

今度こそ本当に、漑は白羽を再び戻れぬ場所へ置き去りにしてしまった。

こうするしかないのだ、もう何もできないのだと、幾度も自分に言い聞かせた。手を差しのべることも、抱きしめることも、白羽の偽りを暴いた漑に許されるはずがないのだから。

最初から、触れてはいけない人だったのだ。

「……っ」

喉がひくりと震え、漑は血が滲むほど強く唇を噛みしめた。

——どうして好きになってしまったのだろう。

想えば想うほど苦痛だけが募る。叶うことも報われることもないとわかっていいるからこそ、はじめての恋は残酷すぎた。

固く閉じた瞼の下からこぼれ落ちた涙に堪えきれなくなり、漑はとうとうしゃくり上げた。

好きにならなければよかった——なんて。

心のどこかで後悔している自分が情けなく、無性に悲しかった。ついには涙の海に溺れて溶けてしまうのではないかというほどに、泣いた。

やがて泣き疲れた漑は、そのまま泥沼に沈むように眠りに落ちた。ふつと目が覚めると、闇はいつそう濃さを増していた。

瞼の上が火傷をしたように熱い。そのままぼうつと放心していると、くぐもったバイブレーションが意識を引き戻した。

振動に合わせて明滅するケミカルカラーの光を頼りに、ぶるぶると着信を訴える携帯電話を引き寄せる。画面を開くと、見慣れた電話番号と『鈴岡順一^{すずおか}』という名前が表示された。

「……もしもし」

ボタンを押して電話に出ると、ひと月ぶりに聞く声が耳元で笑った。

《おいおい、ひっでえ声だなあ。夏風邪でも引いたのか?》

「……順兄」

《そーですよー、漑ちゃんのカッコいいお兄ちゃんの順一くんです

よー。一ヶ月ぶりかあ、元気にしてたか？」

屈託のない兄の口調に、虚脱感にも似た安堵がどっと押し寄せた。

「じゅ、にい……っ」

ぐしゃりと顔を歪ませ、漑は携帯電話を握りしめた。すすり泣く妹の声に気づいたのか、順一が小さく息を呑んだ。

《おい、漑？》

「順兄、どうしょ……あたし、あたしっ」

ぼろぼろと涙とともに溢れ落ちるのは、何にかまうことなくすりついて泣きじゃくりたい、子どもじみた焦燥だった。この家の中で自分がどれほど神経を張り詰めさせていたのか、漑はようやく思い知った。

「あたし、白羽が……白羽に……」

《白羽？ 白羽がどうした。——あいつに、何かされたのか？》

不穩げに声を低める順一に、漑は見えるはずがないというのに激しく頭を振った。

「ちが、違うの！ あたしが、白羽を、傷つけちゃったの……っ」

本当に子どもに戻ったように声が震える。

「もうやだ、もうやだよ。あたし、もうここにいたくない」

《漑——落ち着け、漑。大丈夫、わかったから》

順一は優しく妹をなだめ、微かなため息に声を揺らした。

《……あのな、漑。今日電話したのは、もうすぐ親父の退院の目処がつきそうからなんだ》

「え……？」

《おふくろから連絡があって、あと二、三日のうちに退院できるらしいんだ。そうしたら、おまえも一緒に家に帰ってこいっていうんだよ》

漑は泣き腫らした目を睜り、言葉を失った。

《さっき、廣世さんには伝えたんだ。ちょうど俺もバイトが終わるから、帰る途中でおまえを迎えにいくよ。そうだな……たぶん、明

明後日になると思う》

明後日——三日後。三日後にすべてが終わる。

《だからそれまで——兄ちゃんが行くまで、待ってられるか?》

幼い頃のような問いかけに、漑はこくと喉を鳴らした。

……ああ。

なんて、あつけない。

どこまでも漑を打ちのめした初恋は、こんなにも脆く、単純なものだったのだ。

「……………うん」

最後に頬を流れ落ちた雫は、ひどく冷たかった。

「待ってる」

漑の応えに、順一は「ん」とだけ小さく笑って頷いた。収まりきらない妹の気持ちを見抜いて何も言わない労りが胸に沁みた。

《じゃあ、荷物まとめておけよ。詳しいことが決まったら、また電話するから》

「うん」

《無理しないで、おとなしくしてるんだぞ》

「うん。……順兄」

《うん?》

「……………なんでもない」

生乾きの頬でなんとか笑って、漑は電話を切った。途端、掌から携帯電話が転がり落ちる。

ぐつたりとベッドに打ち伏した漑は、ひりひりと疼く瞼を下ろした。

この恋は漑自身ですら知らぬうちにはじまって、そして終わっていく。さんざん振り回され、傷つけられたというのに、漑は何ひとつ得られなかった。最初から最後まで、彼女はとうとうもなく子どもだった。

淡雪のように消えていく初恋の終わりを、漑はひっそりと苦い涙の味とともに噛みしめた。

三十日目、晩夏

最後の日の空は、泣きたくなくなるほど青かった。

過ぎゆく夏を惜しむように降り注ぐ蝉時雨がアスファルトの熱に溶けていく。ぬるい風が泳ぐ街路樹の木陰に佇み、漣はぼんやりとその残響を聞いていた。

高本家の門前には、兄の愛車であるライトグレーのワンボックスカーが停まっている。そのトランクにはすでに漣の荷物が積みこまれ、あとは発車を待つばかりだった。

当の運転手である順一は、門を挟んで廣世に挨拶をしていた。わざわざ見送りのために半日休暇を取ったという叔父に、兄が申し訳なさそうに頭を下げる。

「すみません、お忙しいのに休んでもらっちゃって」

「いいや、漣ちゃんには白羽がとてもお世話になったんだ。こちらがお礼を言いたいくらいだよ」

眠たげな目元をゆるめ、廣世は淡く微笑んだ。順一はちらりとこちらを見たが、何も言わずに明るい笑みを返した。

「白羽の『お姉ちゃんっ子』は今でも健在みたいですね。俺としてはちよつとさみしいですけど」

「すまないね……今日も声をかけたんだけど、どうしても見送りをしたくないと言って部屋から出てこないんだ」

廣世は困ったように眉尻を下げ、閉ざされたままの玄関のドアを振り返った。

「よほど漣ちゃんと離れるのが堪えているんだろう。……あの子がかんなわがママを見せるのは、本当に久しぶりだ」

順一はがりがりと頭を掻くと、不意に漣を振り向いた。

「——漣」

漣は反射的に兄を睨んだ。しかし妹の視線など気にもせず、順一はちよいちよいと手招きをくり返す。

「ほら、ちゃんと叔父さんに挨拶しろよ」

そう言われてしまえば従うしかない。漑は渋々木陰から出ると、兄の少し後ろまで近づいた。

門の向こうで、廣世は優しい笑みを浮かべている。こうしてみると、白羽の浮かべる儚い表情は父親によく似ていた。

「……お世話になりました」

なんと云えばいいのかわからず、ようやく絞り出したのは味気ない感謝の言葉だった。順一が呆れたような顔をするのが見え、慌てて頭を下げる。

「ホントにありがとうございました！」

「こちらこそ、白羽のそばにいてくれてありがとう。おかげで、あの子の笑った顔をまた見ることができたよ」

漑は小さく息を呑み、がばりと顔を上げた。

「叔父さん……あの、お願いがあるんです」

「なんだい？」

汗ばむ掌をぐっと握りこみ、漑は廣世を見据えた。

——ずっと、考えていたことがある。

白羽が求めていたのは、さびしさを埋めてくれる、あたたく優しい『母親』だ。その役割を拒んだ自分に手を差しのべる資格はない。だが、廣世なら——まぎれもない白羽の父親である彼なら、まだ間に合うのではないか。

たったひとり残された息子を、廣世はちゃんと想っている。あまにも不器用で、臆病で、愛情の示し方を知らないだけで。

もうあり合わせの代役で隙間を埋めることはできない。だからこそ、ふたりにはきちんと向き直ってほしかった。

ふたりを心から愛していた紗夜子のために。何より、ふたりがともに生きる家族であるために。

「白羽と一緒にご飯を食べてあげてください」

廣世の目が大きく見開かれる。

「白羽の料理は、ホントにおいしいんです。きっと叔母さんが死ん

じゃってから、何度も何度も練習したんだと思います。叔父さんが安心して仕事に行けるように……ひとりでも大丈夫だよって、言えるように」

うるさいほどの蝉の音が遠くなる。体の底から、胸の奥から、波濤のような感情が沸き起こり、視界が熱く濡れていく。

——ねえ、白羽。

あたしはあんたが好きなの。本当に大好きなの。憎たらしくて、めちゃくちゃに壊してやりたいほど大っ嫌いで、だけどやっぱり大好きなのよ。

もう欲しがらない。あたしのものにしたいなんて望まない。だから、どうか——幸せになって。

あたしはもう守ってあげられない。叔母さんもいない。だけど、あんたを愛してくれる人は必ずいる。ここに、確かにいるのよ。

どうか気づいて、奇跡のようなこの事実に。

「でもホントは、叔父さんにおいしいって言うてもらいたくて頑張ったんだと思うんです。だから……だからっ」

最後は声にならなかった。

しゃくり上げそうになり、澪は深く俯いた。唇を噛みしめて嗚咽を堪えていると、ぽつりと眩きが落ちた。

「……僕は、まだあの子に必要とされているのかな」

澪はぐいっと目元を拭くと、度廣世を見上げた。

途方に暮れたようなまなざしに、精いっぱい笑顔で頷いてみせる。

「——はい」

廣世は小さく息を吸いこむと、静かに目を伏せた。

「ありがとう」

その声を聞いて、澪は心から安堵した。

ああ、きつと大丈夫だ。

「……そろそろ行くか？」

黙ってやりとりを見守っていた順一が尋ねてくる。澪はこくと

頷いた。

「お義兄さんたちによく伝えてくれ。様子が落ち着いたら、こちらからお見舞いに伺うよ」

「ありがとうございます。それじゃあ、また」

「気をつけて」

もう一度叔父に頭を下げ、兄妹は車に乗りこんだ。漣がシートベルトを締めたことを確認し、順一はエンジンを入れた。

車窓の向こうで廣世が手を振っている。漣がそれに応えると、ゆっくりとワンボックスカーは走り出した。

徐々に廣世の姿が遠ざかっていく。やがて高本家が見えなくなつたとき――漣は手を止めた。

「うそ……」

思わず助手席から後ろに身を乗り出す。運転席の順一が驚いたように目を丸くした。

「どうした？」

高本家が景色にまぎれる寸前、玄関から飛び出してくる人影が見えたのだ。漣は夢中で目を凝らした。

順一はバックミラーを見やり、「おい、あれ！」と声を上げた。

漣は大きく息を吸いこんだ。

夏の陽射しに白く灼けた道のずっと奥に、自転車に乗って追いかけてくる少年が見えた。サドルから腰を浮かせ、全力でペダルを漕いでいる。

「白羽……」

――どうして追いかけてくるの。あたしの声は、もう届かないはずなのに。

「まったく、あいつは……」

順一は呆れたように呟いた。ゆるゆると落ちはじめたスピードに、漣はとつさに叫んだ。

「止まらないで！」

「漣？」

「お願い、止まらないで。このまま走り続けて」

「だって、おまえ……」

困惑した様子で順一はバックミラー越しに従弟を見た。白羽は肩で息をしながら、それでも距離を縮めようとしていた。

漣は兄の腕にすがり、必死に訴えた。

「あたしはもう、白羽に何もしてあげられない。しちやいけないの。だからこのまま行って……お願い、順兄」

順一はしばらく口をつぐんでいたが、厳しい声で尋ねてきた。

「おまえはそれでいいんだな？ 白羽に何も言わないまま、どう思われようが、これつきりでかまわないんだな？」

漣は目を閉じた。

たとえ、二度と会えなくても。嫌われ、憎まれ、何より焦がれた透きとおるような美しい笑みを目にするのができなくても。

「……うん」

ただ、小さく頷いた。

「それでもいい。それで、いいの。あたしは——もう白羽の『お姉ちゃん』には戻れないから」

夢から覚めたウエンディは、決してネバーランドを振り返ってはならない。永遠の少年を思い出に変えて、大人にならなければならぬのだ。

無言のまま、順一は強くアクセルを踏みこんだ。エンジンが唸りを上げ、子ども時代の最後の夏が遠く過ぎ去っていく。

漣は耐えきれず、とうとう両手で顔を覆った。

本当に、本当に、好きだったのだ。もう二度と恋なんてできないと思うほどに。

あとからあとから溢れる想いに声を振り絞り、漣は泣いた。言葉にならない嗚咽で叫び続けた。

大好きだよ。

ばいばい、白羽。

四年後、はじまりの春

肩まで伸びた髪を揺らす風は、ひどく優しくかった。

頬に流れたひと筋を耳まで掻き上げ、澪は晴れ渡った春の空に目を細めた。清々しい光に満ちた、はじまりの季節を祝福するかのような青空だ。

「おーい、忘れモン」

「え？」

振り向いた途端、小さい何かが目の前に飛んできた。慌てて受け止めたのは、買い替えたばかりの携帯電話だった。

「ちよつと順兄、落ちたらどうしてくれんのよ。まだ新品なんだからね！」

「忘れたおまえが悪いんだろうが」

愛車の屋根に腕を乗せた順一は、呆れ顔で妹を睨んだ。三年前に大学を卒業し、今は食品メーカーのサラリーマンとして働いているブルーグレーのスーツをきつちりと着こなしている様は、なかなか社会人が板についていた。

「はいはい、そうですね。わざわざありがとうございます！」

「かつわいくねー……」

兄のぼやきに、澪はつんと澄まして舌を見せた。

——あの夏から、四年の月日が流れた。

澪は高校を卒業後、県内の公立大学に進学した。地元から通うには不便な距離にあったため、学生向けのアパートでひとり暮らしをしている。この四月で無事に三回生へ進むことができた。

すでに二十歳を過ぎた彼女を、少女と呼ぶのはもはや難しかった。高校生の頃までボブカットに切り揃えていた髪を長く伸ばし、うっすらと化粧を施した顔に幼い面影は見当たらない。小花柄のスカートからすんなりと伸びた足は、華奢なパンプスに慎ましく収まっている。

春休みを終え、今日は新学年最初のオリエンテーションが行われる予定だった。漑は昨日まで帰省していたのだが、順一が出勤がてら大学の近くまで送ってくれたのだ。

漑は舌を引っこめると、いたずらっぽく笑った。

「嘘ですよ。優しいお兄様のおかげで電車代を節約できて、たいへん感謝しております」

「うむ、わかっていればよろしい」

仰々しく頷いた順一は、ちらりと腕時計を確認した。

「さてと、そろそろ行くか。正門まで送らなくていいんだな？」

「うん、きつと混み合ってるだろうからここで平気。じゃあ、いってきます」

「おう、気をつけてな」

軽く手を振って歩き出そうとした漑を、「あっ」という唐突な声で引き留めた。

「なに？」

「あ、いやー……」

順一は言葉を濁らせた。思わず眉間に皺を寄せると、困ったような顔で訊いてくる。

「おまえってカレシとか……つき合ってるやつってないんだよね？」

「はあ？ 急に何よ」

「いや、な。大学に入って三年も経つのに、そういう話を聞いたことねえなーって」

「いたら順兄に送ってもらわけないじゃん」

「いったい何が言いたいのかという妹の胡乱げな視線に、順一は苦笑した。

「……すまん、なんでもない。ほら、早く行ってこい。遅刻するぞ」
漑は釈然としないながらも「じゃあね」と応えた。ぐずぐずしていると本当に遅れてしまう。

兄と別れ、漑は大学を目指して歩きはじめた。

彼女の通う大学は高台の上に建っており、構内に入るためには長い坂をのぼらなければならなかった。しかし傾斜がゆるやかなのでそれほど苦ではなく、何より今の季節は時間をかけて歩くべきだとだれもが思うだろう。

——それはまさに、薄紅色のトンネルだった。

道の両側に伸びる桜並木が満開を迎え、あたりは桜色の雲に包みこまれていた。明るい陽射しのなか、やわらかな風にはらはらと花びらが舞う光景は、美しい夢を見ているようだ。

澪はほつつとため息をついた。

なんてあたたかく、幸せな情景なのだろうか。呼吸するたびに胸の奥から花の色に染まってしまいそうだ。

何げなく差し出した掌に、ひらりと一枚の花びらが落ちてくる。

澪はそつとそれを握りしめ、胸に引き寄せた。

瞳を閉じれば、今でも簡単に思い出せる。七年前の凍てつく春の雨、そのなかで抱きしめた少年の細い背中を。

——どうして、忘れられるだろう。

あれから三度の夏がめぐり、澪が白羽と再会することはなかった。会いにいくことはもちろん、手紙を出すことも自分に許さなかった。ときどき母から伝えられる彼の近況に耳を澄ませながら、それでも前だけを向き続けた。

叔父とはじめて大喧嘩したこと。それから少しずつ会話が増え、ともに食卓を囲むようになったこと。高校に進んでからは部活動に入り、友達と夜遅くまで遊んで帰ってくるのがあったこと。代わりに叔父がときどき料理をするようになり、息子から駄目出しばかりされていること。だが文句を言いながらも、決して父の手料理を残さず平らげること。

見守ることも、寄り添うこともできなかったけれど、それでも心は白羽を想い続けていた。四年間、一度たりとも消えることなどありはしなかった。

恋情を断ち切れないことに苦しんだこともある。痛みも涙も、ま

だ憶えている。だが、彼が確かに自分の道を歩いているということは、いつしか澪にとってかけがえのない励ましになっていた。

ともに進むことはできなくても、同じ未来という夢を見ているのだと思えば、負けてなんていられないと力が湧いてきた。白羽の存在が、何度立ち止まった背を押してくれただろう。

澪はたったひとつだけ、自分にわがままを許した。報われることも届くこともない、だからこそ甘く幸福な片想いを。

もしかしたら、自分は死ぬまで白羽に恋しているのかもしれない。それも悪くない、なんて今では思う。

たとえこの先、他のだれかを好きになつたとしても——胸を焦がしたあの夏を忘れない。最初で最後の、初恋の日々を。

ずっと特別で、大切に、大好きな人。

不意に、ざあつと風が桜並木を駆け抜けた。

澪は息を呑んだ。

散らされた花びらが大きく舞い上がり、薄紅色の雨となつて一面に降り注いだ。冷たい悲しみの涙ではない。幾百幾千の、喜びの歌声だ。

——坂の上から、こちらに向かって歩いている人がいる。

花の雨に打たれながら、ゆつくりと、まっすぐに、澪の許へ。

魅入られたように、澪は視線を逸らすことができなかった。

カジュアルな長袖のＴシャツとダメージジーンズに包んだ、すらりとした長身。春の光が、やわらかな髪を明るく栗色に、澪を見つめる瞳を琥珀色に輝かせていた。白い美貌から少女めいた儚さはすっかり拭い去られ、優しくで涼やかな目元に父親の面影を覗かせている。

「——久しぶり」

やはり叔父によく似た低い声に、澪は唇を震わせた。

「し、ら……は？」

もはや少年ではない、青年——白羽は、そっと微笑んだ。

「うん、僕だよ。……澪ちゃん」

「どう、して……」

「さつき、順兄ちゃんからメール貰ったんだ。澪ちゃんが来たがら迎えにいったってやってってくれて」

「ちょ、ちょっと待って。順兄からってどういうこと？ だいたいなんであんたがここにいるの!？」

目の前にいるのが従弟だとわかり、澪はいつそう激しく動揺した。思わず食ってかかると、白羽は長い睫毛を瞬かせた。

「……もしかして、聞いてない？」

「だから何をよ！」

「僕、この大学に通うことになったんだよ」

澪は目玉がこぼれ落ちるかと思った。

「澪ちゃんと学部は違っけど、部屋を借りたアパートは一緒。どうせなら澪ちゃんの部屋で暮らせばいいって伯母さんが言ってくれたんだけど、さすがに遠慮したよ。いろいろまずいしね」

苦笑して白羽が語ったのは、とんでもない内容だった。

「あれは信頼されてるっていうよりも、完全に澪ちゃんの弟扱いなんだろうね。まあ、だから四年前だってほぼふたり暮らしさせたんだろうし」

言葉を失って青ざめている澪に気づき、彼はふと口をつぐんだ。

「……………ずっと考えてた。何がいけなかったのか、どうして僕は澪ちゃんを失ったのか」

今すぐ背を向けて逃げ出すべきなのに、澪は一步も動けなかった。彼女の心臓を射抜く白羽の瞳は、あの頃よりも深い色を湛え、だが遙かに澄みきっていた。

「お母さんがいなくなって、僕はこの世でひとりぼっちになったと思った。さびしくて、怖くて……だからそばにいるって言ってくれた澪ちゃんを、なんとしてもつなぎ止めたかった」

白羽はふつとほろ苦い笑みをこぼした。

「それが澪ちゃんを傷つけるかもしれないなんて、少しも思いつかなかった。自分を守ることばかりで……どうしようもないくらい、

子どもだったんだね」

不意に白羽の手が伸びて髪に触れた。びっくりと肩を揺らした漣を、白羽は切なく見つめる。

「最後の日、漣ちゃんがお父さんに言ってくれたこと……全部聞いたよ」

「……え？」

白羽の指先がひとひらの花びらをつまみ上げた。彼は漣の手を優しく取ると、握ったままの掌を開かせてそこに加えた。

「そのとき、わかったんだ。僕はなんて馬鹿なんだろうって」

目を見開く漣に、白羽は笑った。穏やかな春の光によく似た——漣がいつとう好きな笑み。

「僕はひとりなんかじゃなかった。いつだってきみがいてくれた。僕の手を引く張って、守ってくれた。縛りつける必要なんてなかった。身代わりなんて、いらなかったんだ」

青年の大きな手がためらいがちに頬を撫でる。漣は震えそうな双眸で、じっと白羽を見上げた。

「だって、きみは身代わりになんかならなかった。僕は漣ちゃんだったから、そばにいてほしいって思ったんだ。だれでもない——僕を見つけてくれたきみに」

みるみるうちに膨れ上がった熱が弾け、漣の頬を伝い落ちていく。白羽の指が、その跡をそっと拭き取った。

「うつん……僕が、きみのそばにいたかったんだ」

白羽は押し殺したような声でささやいた。

「だから、追いかけてようって思った。必ず追いついて、謝って、きみに許してほしかった」

漣ちゃん、と白羽が呼ぶ。

子どもの頃のように、しかし火の粉のような烈しさを秘めた熱情をこめて。

「僕の周りには、お父さんも、順兄ちゃんや伯父さんも伯母さんも友達も、たくさんの人がそばにいてくれる。だけど一番僕がそばに

「いたいののは……きみだけだよ」

「なんで……今更、あたしに許してほしいの？」

しゃくり上げながら、漑は白羽を睨みつけた。

「あたしはもうあんたを甘やかすなんてまっぴらよ。優しいお守りが欲しいなら、違う女のところに行って」

「違う！」

白羽は激しい声を上げた

「そりゃ甘ったれだけど、僕だって男なんだ。好きな女の子に頼るんじゃないくて、頼られたいって思うよ！」

「……え？」

ぽかんと目を見開く漑の前で、白羽は悔しそうに頬を赤らめて顔を背けた。

「自分の馬鹿さ加減がようやくわかったあと、どれだけ恥ずかしかったと思う？　いくら年上だからって、僕より小さな女の子に、赤ん坊みたいにべったり張りついてたんだから」

漑は奇妙な気持ちで、まじまじと白羽の横顔を眺めた。あの甘えん坊を絵に描いたような弟分が、男のプライドを語る日が来るなんて。

——白羽は、こんなに大きかっただろうか。

「……馬鹿ね」

漑は泣き笑うように苦笑した。

「あたしは別に、あんたに守ってほしいなんて思っていないわよ」

「……わかってるよ。僕が勝手に思ってるだけ」

白羽は頬を紅潮させたまま、きっぱりと言った。

「だけど、他のやつに譲るなんていやだ。弟なんかじゃない、男としてきみに見てほしい」

「遅いわよ。どれだけ経ったと思ってるの？　四年よ、四年。惚れられた強みだなんて胡座かいてんじゃないわよ！」

「中途半端なまま会いたくなかったんだ。ちゃんと高校を卒業して、進路も決めて……胸を張って、漑ちゃんに会いたかった」

たくましい腕に引き寄せられる。四年ぶりの抱擁はぬくもりに満ちて、息が詰まりそうなほど幸福だった。

「いっぱい泣かせてごめん。あのときは答えられなかったけど、今なら言える」

漑は堅い男の胸に頬を寄せた。そつと背に手を回すと、白羽はいつそう腕に力をこめた。

「きみが好きだよ。……、漑」

風が吹くたび、雨が降る。

春の、優しい花の雨が、ふたりの上に降り注ぐ。

「……あたしも」

心から微笑んで、漑はささやいた。

「あたしも——ずっと、ずっと、大好きだった」

ふと、舞い散る花びらの向こうに、手をつないだ少年と少女の後ろ姿が見えた。

ふたりはこちらを振り向くと、夏の太陽のような笑顔をいっぱいに広げた。気の強そうな、小柄な少女が手を引くと、彼女より背の高い少年は、美しい顔をいつそう綻ばせて頷いた。

そして裸足のまま、白い光のなかを楽しそうに駆けていく。

とつさに漑はふたりを呼び止めようとして、ああそうか、と小さく笑った。

—— 今度こそ、本当に、さようなら。

「……どうしたの？」

不思議そうに顔を覗きこんでくる白羽に、漑は笑んだまま首を横に振った。

「なんでもない。……って、そうだ、オリエンテーション！」

「へ？ …… ああっ！」

「もう、やだやだ、完全に遅刻じゃない！ あんたのせいよ！」

慌てて時刻を確認すれば、すっかり開始時間を過ぎている。悲鳴を上げる漑の手を、さつと白羽がさらった。

「走ろう、漑」

「え、ちょっと……白羽ってば！」

降りしきる桜色の雨のなか、ふたりは勢いよく走り出した。変わらぬ約束のようにしっかりと手をつないで。違うのは、白羽が漣の手を引いているということ。

永遠を願ったピーター・パンはもういない。だが、白羽がここにいる。それだけで、漣は充分だった。

いつしかふたりは笑っていた。心の底から、笑っていた。

ネバーランドに別れを告げて、限らない未来へと続く道をまっすぐ駆けていった。

四年後、はじまりの春（後書き）

S p e c i a l t h a n k s

すう様

いちお様

お気に入り登録してくださった方々、評価してくださった方々、
最後までおつき合いくださった方々、本当にありがとうございました！

I m a g e s o n g

A J I S A I 『ハロー』

ベン・E・キング 『スタンド・バイ・ミー』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3874i/>

グッバイ、ネバーランド

2011年10月6日03時31分発行